



駿府と今川氏

第18回

駿府の繁栄を支えた安倍金山

黄金製梅花紋飾り 金具の発見

古文書や公家の日記などによつて、今川氏から京都の公家や幕府の要人たちに黄金が贈られていたことは早くから知られていた。例えば、「飯尾文書」によつて、今川氏親から飯尾近江守に黄金十両が贈られていたことが知られ、三条西実隆の日記『実隆公記』によつて、やはり氏親から実隆に和歌の添削のお礼として黄金が贈られていたことも有名な話だった。

しかし、今川氏が滅亡してしまつたこともあり、今川氏の財政基盤となつていたはずの黄金については、それを証明する遺品はなかつたのである。ところが、昭和五十七年（一九八二）の駿府公園内今川氏遺構の発掘調査の時、まさに物的証拠ともいふべき小さな黄金製の板が発見されたのである。

これには梅の花を象つた彫金が施されており、黄金製梅花紋飾り金具として報道された。箆笥の飾り金具だったのか、女性の化粧箱の飾り金具だったのか、あるいはもっと別のものだったのかかわからないが、いずれにせよ純度の高い金製品だったわけで、今川氏の文

化が文字通り黄金文化だったことが確実視されたのである。

金の採取方法の いろいろ

今川氏の時代には、安倍川は駿府の町の中を流れていた。安倍川の上流には安倍金山があった。総称して安倍金山と言われているが、梅ヶ島金山・大河内金山など、それぞれの金山名で呼ばれることもあり、さらに梅ヶ島金山を例にとれば、日影沢金山・入島金山・関の沢金山・湯ノ森金山といったいくつかの金山からなつていたのである。

では当時、それらの金山からどのようにして金を採っていたのだろうか。実は、産金の方法は時代によつて変化しており、今川氏親の頃と義元の頃とは違っていた。

氏親の頃は砂金採取が主で、これには二つの方法があった。川金採取の方法と柴金採取の方法である。川金採取は沢流しとも言われ、「ねこだ」と呼ば

れる藁製の席に砂金を含んだ砂を流し、それを「ゆり板」と呼ばれる選別用の板を使って砂金だけを選び分けていく方法である。柴金採取は、柴間と呼ばれる古い時代の川底の土砂を掘って、あとは川金採取と同じ手順で砂金を採る方法であった。

それに対し、義元の時代には灰吹き法という精錬技術が導入され、金鉱石を砕いて鉛と合金させて金を産出する方法が取られており、砂金採取では限界に達していた産金量が急速に増えているのである。



▲安倍金山の一つ、梅ヶ島の日影沢金山地

撮影：水野 茂